

WS061 宗教心理学的研究の展開(6)

—死生学と宗教心理学の相互関係性を探る—

若者にとっての死

—“死” という脅威は若者に何をもたらすか—

神戸学院大学大学院
人間文化学研究科
松田 茶茶

◆心理学研究における，“死”にまつわる諸変数◆

§ 死の概念の発生・発達

§ 死にまつわる概念、観念、イメージ等の文化間比較

§ 死にゆく人々のたどる心理プロセス

§ 死にゆく人の周囲の人々のたどる心理プロセス

§ 死別経験者のたどる心理プロセス、ケア

§ 死への態度の構造

→多面的・輻輳的な構造をもつ。

(Spilka, Stout, Minton, & Sizemore, 1997; Thorson & Powell, 1988, 1989; Wong, Reker, & Gesser, 1994)

ex.) **不安**、恐怖、強迫、抑うつ、受容、etc...

などなど...

→**死の不安は、性格特性や心理的不適応と強く関連する。**

ex.) 神経症傾向、外向性、タイプA、悲嘆、抑うつなど...

(Conte, Weiner, & Plutchik, 1982; Cox, Borger, Asmundson, & Taylor, 2000; Frazier & Foss-Goodman, 1988-89; Maltby & Day, 2000; White & Handal, 1990-91)

健康心理学

◆ “死の不安” の特徴 ◆

§ 青年期 > 中年期・老年期

(Neimeyer, Moore, & Bagley, 1988; Neimeyer & Van Brunt, 1995; Thorson & Powell, 1994; Wong, Reker, & Gesser, 1994)



ただし、

死に対する観念や態度(死の不安を含む)は、

§ 生涯にわたり発達変化していくもの

§ 文化的・宗教的特性を帯びたもの

(Florian & Kravetz, 1983; James & Wells, 2002; 岡村, 1983; 丹下・坂口, 1987)



したがって、

死の不安の構造が「発達段階を越え、同質の観念のもとに形成されている」とは考え難い。



青年期に特化させた「死の不安」研究

◆ “死の不安” の特徴 (補足) ◆

§ 死の不安は、性格特性や心理的不適応と強く関連する。

(Conte, Weiner, & Plutchik, 1982; Cox, Borger, Asmundson, & Taylor, 2000; Frazier & Foss-Goodman, 1988-89; Maltby & Day, 2000; White & Handal, 1990-91)



§ 死の不安は、すべての人間に内在する。

(Hayslip, Guarnaccia, Radika, & Servaty, 2001-02; Miller & Mulligan, 2002, Schumaker, Warren, & Groth-Marnat, 1991)

§ 死の不安は、あらゆる不安の根底に横たわるもの

(Kastenbaum, 1972)



§ 死の不安は、人間(動物)がもつべくしてもっているもの

§ 死の不安は、適正水準では必要なもの(高すぎても低すぎても困難が生じる)

◆青年期における“死”への距離◆

厚生労働省(2007)の官報統計より

§ 青年期の死亡率 < 壮年期・老年期の死亡率(年齢階級別死亡数)

一方で、

§ 死亡率は乳幼児期の高い値から徐々に減少し、青年中期前後(15~19歳)に再び大幅に上昇する。

§ この時期の死因としての「不慮の事故」、「交通事故」、「自殺」の率が、ほぼ同じ増減曲線を描く。



青年期に至って、死は急激に身近なものとなる可能性

もちろん、

§ 上記のようなネガティブな方向性での思考のみならず、死そのものについての熟考・沈思も、青年前期あたりからその顕現や重要性が説明されている(丹下, 1999)。

◆ “死の不安” の関与する問題 ◆

(1) § 高い死の不安は、リスク行動の要因となりうる。
(Crisp & Barber, 1995; Miller & Mulligan, 2002)



(2) § 死の不安は人を健康行動へ導く。
(Knight & Eifenbein, 1996; Zajonc, 1965)

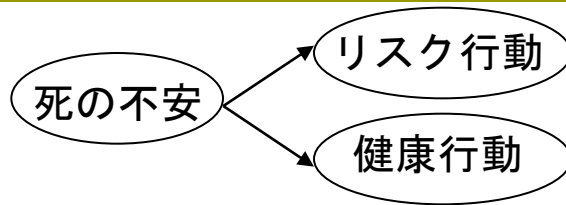
§ 死の不安はQOLの向上を促す。
(Hayslip, Guarnaccia, Radika, & Servaty, 2001-02)

(1) 「死の不安が高まる」
⇒ 「自己内に存在する生命不安を打ち消そうとする」
⇒ 「敢えて生命危険をはらむリスク行動をとる」
⇒ 「無事」
⇒ 「自己の脆弱性の否認に成功」

(2) 「死の不安が高まる」
⇒ 「健康行動をとる」
⇒ 「死の不安に対する問題焦点型解決」

◁ (※ “Health Locus of Control” が関与する。
(Wallston, Wallston, Kaplan, & Maides, 1976))

◆ “死の不安” の関与する問題 (つづき) ◆



なぜ分岐するか？

(1) Health Locus of Control

(2) 死の不安の、青年期における特有構造

● 青年期以外、ならびに青年期を含む成人全般を対象とする「死の不安尺度」の構造

- ・ Death Anxiety Scale (Templer, 1970)
- ・ Templer-McMordie Death Anxiety Scale (McMordie, 1979)
1因子
- ・ Death Anxiety Questionnaire (Conte, Weiner, & Plutchik, 1982)
5因子 (未知性、苦痛、孤独、自己消滅、???)
- ・ Revised Death Anxiety Scale (Thorson & Powell, 1994)
4因子 (不動性・孤独、苦痛、終焉、埋葬・風化)

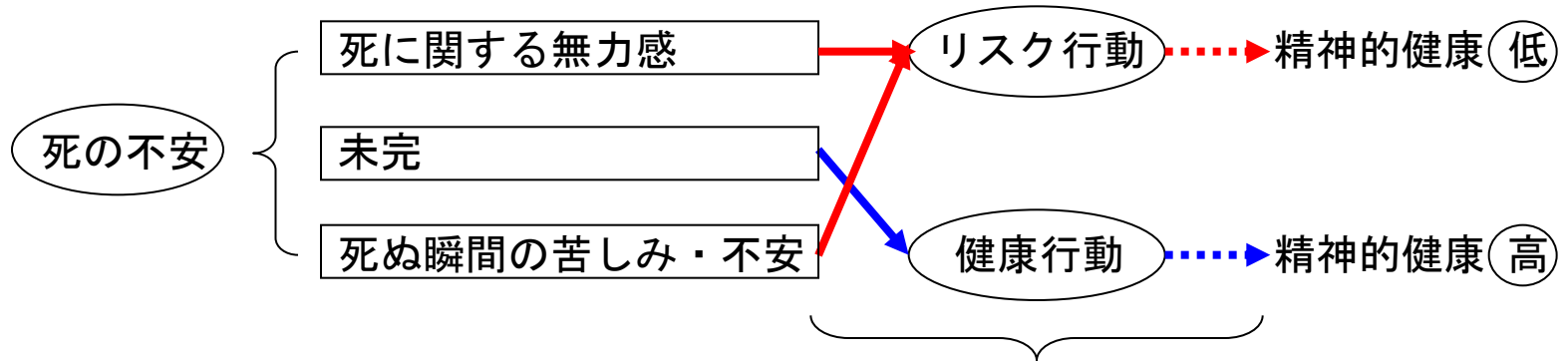
● 青年期特化の「死の不安尺度」： “Personal Death Anxiety Questionnaire” (松田, 2004) の構造

3因子 (死に関する無力感、**未完**、死ぬ瞬間の苦しみ・不安)

死によって夢や希望、願望などがかなえられなくなる
こと、人生を楽しめなくなることに對する不安

☆ 青年期に特化していない先行研究
では得られなかった因子

◆ “死の不安” の関与する問題(つづき) ◆



赤・青矢印のパスを検証するため調査(松田, 2008)
(対象: 男性290名(M=19.57)、女性316名(M=19.21))

↓
いずれも、男女ともに有意

↓
(死の不安の、適正水準の必要性の実証的確認)

さらに、

死に対する観念や態度(死の不安を含む)は、
§ 生涯にわたり発達変化していくもの
§ 文化的・宗教的特性を帯びたもの

} 左記をふまえ、死の不安と宗教的心理変数の関連性の検討

◆ “死の不安” と “宗教的心理変数” ◆

<死の不安と宗教的心理変数との関連> (PDAQと宗教観尺度の実施調査より)

※宗教観尺度…金児(1997)

対象者：男性55名 ($M=19.29$)、女性72名 ($M=19.53$)

	男性	女性
§ “死に関する無力感” と “靈魂観念”	.319*	.250*
§ “未完” と “靈魂観念”		.342**
§ “未完” と “加護観念”		.340**
§ “死ぬ瞬間の苦しみ・不安” と “靈魂観念”	.339*	.344**
§ “死ぬ瞬間の苦しみ・不安” と “加護観念”	.284*	

※有意であったもののみ表記、数値は全て相関係数 r 、* $p<.05$ 、** $p<.01$

☆ 宗教観尺度3因子のうち、“向宗教性”には死の不安との関連が見られない。

☆ “靈魂観念” “加護観念” という日本人の宗教観測定に特化した因子とのみ死の不安は関連する。

◆ “死の不安” と “宗教的心理変数” (つづき) ◆

先行研究では、

「宗教性と死の不安は負の関係性を示す」

(Florian & Kravetz, 1983; Jeon, 1997; Roshdieh, 1997; Young, 1992)

と言われるが、

この調査では、**“向宗教性”以外の宗教観因子と死の不安との間に正の関係性が示された。**
(死の不安が高い⇨霊魂観念・加護観念が高い)

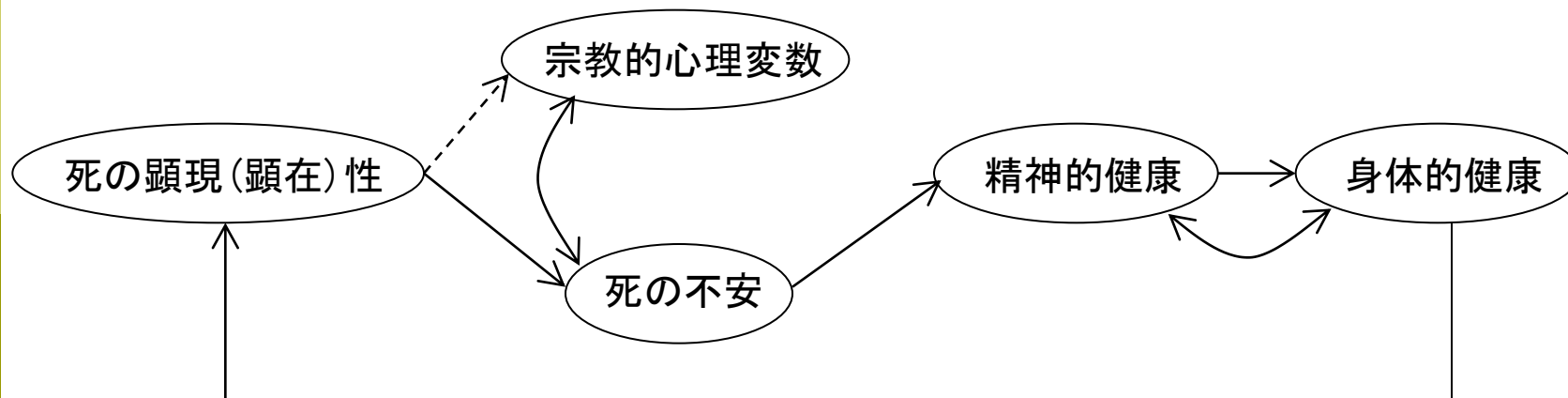
河野(1998)の研究中にも、30歳を境として、死の不安と宗教性の関係性の正負が逆転するという現象が報告されている。

※ただし、

「宗教性と死の不安は負の関係性を示す」とする研究で言われる“宗教性”とは、金見(1997)の“向宗教性”の概念に近いことを考慮しなければならない。

◆まとめ◆

- § 青年期の特有構造をもつ「死の不安」のいずれの因子も、ある一定の範囲で宗教的な心理変数と関連する。
- § 「死の不安」と「宗教的心理変数」との関連のしかたも、発達段階によって異なる。(可能性)



Tomer & Eliason(1996)の“死の不安形成モデル”を基に作成した循環モデル



ご清聴ありがとうございました。